

レナ川流域のオオハクチョウ調査に参加して

小 西 敢

1997年7月13日、晴天の新潟空港を後にして、私達8人はレナ川流域のオオハクチョウ調査に旅立ちました。

ウラジオストクを經由してサハ共和国に入り、今回の調査に同行するヤクーツク生物学研究所のニコライ・イワノビッチ・ゲルモグノフ副所長と生物学研究所の研究者の方々と合流しました。

ヤクーツク生物学研究所では、今回の調査地は保護地区として広大な面積（約6万km²）を持ち、大小様々な湖沼群が点在する事やレナ川流域ではオオハクチョウの繁殖地の中心に位置する事などの説明を受け、今回の調査の打ち合せを行ないました。また、前回行なったインディギルカ川のオオハクチョウ調査や真冬のトナカイ調査、ソデグロヅル衛星追跡調査の内容を教えてくださいました。

ヤクーツクは、北緯62°と緯度が高いにもかかわらず、連日気温は30度を超えており、私の住んでいる浜頓別よりも暑い夏を体験してきました。ヤクーツクで船をチャーターする前にヤクーツク自然博物館に寄り、北方系の動物（シロクマ、ヘラジカ、トナカイ、オオカミ、ケワタガモ、ホンケワタガモ、ヒメクビワカモメ等）の剥製や北海道のアイヌ文化に似たヤクーツクの民族文化を見学してきました。そして、船をチャーターしてサンガールに向かったのは、16日の午後4時頃でした。

日中の気温が高かったので、時速23km前後で進む船の甲板は涼しく気持ちのいいもので、レナ川を下っていく途中、ハジロクロハラアジサシやヒメカモメが、水面を掠めながら飛んでいるのが印象的でした。下流へ向かっていくうちに日付けが変わり、しばらくするとレナ川の雄大な朝焼けが私達を歓迎してくれました。

約240kmの川下りが終わり、サンガールに到着。ジェットコースターのように飛んだり跳ねたりするバスに乗ってサンガールの飛行場へ行き、空中調査のため小型セスナ機をチャーターして、オオハクチョウの繁殖地へ。。。。。

どこまでも続く広大なタイガ地帯の上空に私達を乗せた小さなセスナが飛んでいきました。幾重にも枝分かれした河川が、所々途切れ湖沼を作り、針葉樹が湖沼の周辺を覆いつくしていました。また、干上がった河川の砂は、鱗状の美しい形を残していました。そして、いくつかの丘以外は、延々と平坦な風景が続き、自然の規模の違いを肌で感じてきました。

セスナ機が地上を離れて約1時間たった頃、エンジンの騒音にかき消されながらも「ハクチョウ！」と言う誰かの声が聞こえて、焦りながら数多い湖沼の中に白い鳥を探しましたが、見つかりませんでした。セスナ機は無情にも、他の白鳥を探すため更に下流域へ飛んでいきました。次の白鳥を見逃さないため、窓から湖沼を見ているその時、「いたっ！！」私の目に水面を泳ぐ1羽の白鳥の姿が飛び込んできました。白鳥との出会いが終わり、更にセスナ機は下流域へと進んでいきました。結局、

私がセスナ機調査で確認したのは、この1羽だけでした。ヤクーツク生物学研究所のN. I. ゲルモゲノフ副所長も5羽(3ヵ所)を確認したとの話でしたが、予想以上に少ないことで、当初目的の発信機装着は出来るのだろうか、という不安が過ぎりました。

サンガールを後にして、私達は船で下流域(サンガールから更に約130km)へ進み、18日の昼すぎにスィアーベレグス島(レナ川の中州)で、ベースキャンプを張ることにしました。

北緯64°を超えていよいよ白夜の生活が始まりました。キャンプ地についてから、午後10時にボートに乗って周辺環境調査に出かけました。別の中州に上陸し、大量の蚊の洗礼を受けながら、ヘラジカ、オオカミの足跡を確認しました。キャンプ地に戻ったのは、19日の午前1時頃でしたが、明るいため夜中という感覚がなくなっていました。19日まで、連日晴天に恵まれ、気温も30度近くまで上がっており、私はレナ川で泳ぐことにしました。暗褐色に色付けられたレナ川は、急な流れによって突然深くっており、見た目よりも危ないことに気が付きました。しかし、非常に冷たくて気持ちのいいものでした。この川では、キャンプ地で食べていたチョウザメやカワカマスなどの川魚が生息しています。

昼すぎと午後6時頃、ボートで調査を行ないましたが、野鳥たちの姿はあまり見れず、コホオアカ、アオアシシギ、イソシギ、キアシシギなどを確認してきました。キャンプ地に戻り、船の甲板で夕涼み(20日午前0時頃)。気が付くと紺色や薄紅色に色づいた大空が、私達を包み込んでいました。

翌朝起きると天候が急変していました。強風のためテントは破損し、高い波によって調査用のボートが、チャーターしていた船に押し潰されそうになっていました。テントを直して、ボートを引き上げ丸一日待機することになりました。21日になり、風も収まったので、昼すぎにボートで調査を再開しました。八木夫妻とN. I. ゲルモゲノフ副所長の乗ったボートだけ、先に行ってしまう私達は、別の中州でクマ、ヘラジカ、オオカミの足跡を確認し、キャンプ地に戻りました。船に戻るとスコールが降ってきました。八木夫妻の乗ったボートは後から帰ってきましたが、キャンプ地に戻ってくる八木夫妻のボートに手を振ると八木氏が、両手で大きな丸を作っていました。そして、次に白鳥を手で真似ていました。「白鳥を見てきた!!」八木氏が大きな声で、伝えてくれました。私は思わず握手をし他のメンバーも八木夫妻が無事帰ってきたことと白鳥を見てきたことで大喜びでした。この日は、キャンプ生活の最後の日でした。

翌日、ヘリコプターが迎えにきて、再び空中調査を行ないました。白鳥を見つけしだい、ヘリコプターでその場所に下りて、捕獲し発信機を付ける予定でした。まず、八木夫妻が確認した場所に向かいオオハクチョウを確認しました。しかし、換羽期のはずの白鳥が、飛んで逃げてしまいました。今回の計画は前回インディギルカ川で行なった調査と同様に換羽期中の飛べない白鳥を捕獲する予定でした。ヘリコプターは、次の場所に向かい白鳥を確認しましたが、今度は針葉樹が邪魔をしてヘリコプターでは下りることが出来ませんでした。ヘリコプターは更に他の場所に向かいましたが、残念ながら白鳥の捕獲には至りませんでした。

その後、ヘリコプターでヤクーツクに向かいヤクーツクで2泊したあとウラジオストクに1泊して、私達の旅は終わりました。

今回の調査は、レナ川流域(ビリュイ川～リンデ川)の約500km²の面積で行ない、生息環境としては、外敵の危険も少なく様々な湖沼群が点在しており、繁殖に適しているように感じられました。しかし、

実際に私達が確認したオオハクチョウは8羽（私は3羽のみ確認）と非常に少なく、渡りの把握や繁殖地の状態も研究費や人数等の問題から、詳細に調査がされていないのが現状でした。日本と違い、あまりにも広すぎて空中調査以外では、白鳥の生息場所が把握出来ず、生息場所が確認できたとしてもその場所へ行くためには、時間と費用と労力がかかることを実感してきました。

N. I. ゲルモゲノフ副所長によると今回の調査地は、サハ共和国中央部で唯一ハクチョウ類の保護が出来る場所ということなので、衛星追跡調査を行い越冬地と繁殖地を解明し、白鳥が少ない理由を把握して、早急にこの保護区を国立公園化していきたいとのことでした。

結果的には、目的を達成できませんでしたが、私は北東ロシアの現状とコリマ川流域やインディギルカ川流域以外では、ハクチョウ類が少ないということを実感してきました。今後も日露調査によって、ハクチョウ類の研究が進むこと強く願います。

最後になりましたが、今回の調査に参加する機会を与えて下さった松井繁会長、山内昇氏と日本白鳥の会の皆さんに心より感謝申し上げます。

あとがき

レナ川のオオハクチョウ調査について、参加した方全員に感想文を書いていただきました。ハクチョウの繁殖地を一度は訪れてみたいというのが、多くの白鳥の会の会員の長い間の願望であります。今回8名という少人数でしたが、その繁殖地の一つを見ることができました。また、ロシアの研究者との共同調査という枠のなかでは、私たち参加者は日本白鳥の会の代表でもありました。同じ所で同じ期間をすごしたわけですが、参加した人それぞれが、少しずつ違った感想をもったことだと思えます。会の代表としてその感想を会員の皆さんに報告する必要があると考え、全員に原稿執筆をお願いしました。原稿のとりまとめをした者として、それぞれお忙しいなか、原稿をかいていただいた方々にお礼もうしあげます。（藤巻裕蔵）

記録鳥類一覧

1 : ヤクーツク, 2 : ヤクーツク付近のレナ川中洲, 3 : サンガール

4 : ピヤムルシュカ保護区基地, 5 : スィア-ベレグス島とその周辺

(記録は藤巻, 山内, 星子, 小西, ゲルモゲノフの観察結果にもとづく)

	観 察 場 所					備 考
	1	2	3	4	5	
アビ s p.					○	オオハム?
アビ s p.					○	シロエリオオハム?
アオサギ					○	
ガン s p.					○	ヒシクイ?
オオハクチョウ					○	
マガモ					○	
ヒドリガモ					○	?
ハジロガモ s p.						キンクロハジロ?
オジロワシ					○	
トビ			○	○	○	
タカ s p.					○	ハイタカ?
チゴハヤブサ					○	
オオバン					○	
ハマシギ					○	
アオアシシギ					○	
クサシギ					○	
キアシシギ					○	
イソシギ	○			○	○	
ソリハシシギ					○	
オグロシギ					○	
ヒメカモメ	○	○	○		○	
ユリカモメ	○	○	○	○	○	
セグロカモメ		○		○	○	
カモメ		○			○	
ハジロクロハラアジサシ		○			○	
アジサシ	○	○		○	○	
キジバト					○	
アマツバメ	○	○				
キツツキ s p.					○	
アリスイ	○					
イワツバメ		○				
ハクセキレイ	○		○		○	
タヒバリ					○	
アカモズ	○				○	
ツグミ s p.					○	
シベリアセンニュウ	○					
マキノセンニュウ					○	
コホオアカ					○	
カンラダカ		○				
シマアオジ		○				
アトリ s p.					○	
ウソ					○	
スズメ	○					
イエスズメ	○		○			
アオカケス					○	
ホシガラス			○	○	○	
ハシボソガラス	○				○	

越冬地外での親交白鳥の行動を見る

村瀬正夫・村瀬美江

私共の「クロチャン」一族との親交は全くと云ってよい程越冬地（北上市の新堤・北上川）に限られており、彼等の越冬地外での情報はほとんどが他力本願で、他人のデータ或いは連絡に頼るのが常でした。それでも私共の行動許容範囲である福島から盛岡までは連絡があるとすぐに確認に出かけておりましたが、その都度、落胆するケースが多かったのが実態でした。

そんななかで1992年春の北帰時に、「クロチャン」一族の北帰ルートがほぼ推定され、日本野鳥の会研究報 *Strix* Vol. 11 に報告できました。そこに記載されたように「クロチャン」の国内での最終立寄り地は浜頓別のクッチャロ湖で、そこから海岸線に沿って北上しサハリンに向かうものと考えられ、従って「クロチャン」一族をキャッチ出来るのはクッチャロ湖が国内最終観察点とっていました。

1996年4月27日、日本白鳥の会第23回総会が浜頓別で、翌28日、第20回研修会が稚内で開催されたのを機に、クッチャロ湖と大沼とで、早番で北上を飛去した「クロチャン」一族をキャッチすることを試みました。

クッチャロ湖は26日の15時から28日の8時半まで、大沼は28日11時半から29日の11時半までが観察日時でしたが、その間クッチャロ湖には12,000羽を超える白鳥が、大沼には4,000羽程の白鳥が滞留しており、果して簡単にキャッチ出来るかどうかが大いに懸念されました。確かに給餌場や湖岸道路附近にかなりの数の白鳥が寄ってはいますが、湖が大きく、湖面中央や対岸にたまたまよう白鳥も多く、とても全部を観察することなどは出来ない相談でした。それでもこの旅で北上で越冬したり立寄ったりしていた5羽の白鳥を確認出来たので、北上を離れた順に列挙します。

(1)「アピ」：この白鳥は「クロチャン」一族とは無関係のアメリカコハクチョウで、1994年と1996年のいずれも春の北帰途中に北上に立寄っており、今シーズンは3月27日まで北上市の新堤におりました。「アピ」は福島市の阿武隈川でもよく観察された白鳥です。

(2)「ナオチャン」：この白鳥は「クロチャン」の1988年の子「ナガレ」と雌のアメリカコハクチョウ「チビクロ」との子で、「クロチャン」の最初の孫の3羽のうちの1羽。4シーズン連続で飛来しており、今シーズンは3月29日に新堤から飛去しました。「ナオチャン」は「アピ」同様4月26、27、28日のすべてでクッチャロ湖白鳥の舎前で確認され、名前を呼ぶと越冬地同様に急いで泳ぎ寄り、手からパンを受取ってゆきました。越冬地と違いオオハクチョウがいない分だけすいすいと寄ってこれたのが目につき、腹がふくると少し離れて眠り込んでいました。

(3)「ヤン」と「ソーリー」：「ヤン」は「クロチャン」の1990年の子の「ニイチャン」と雄でⅢ型コハクチョウの「バフ」とのつがいの子で、「クロチャン」の2度目の孫3羽のうちの1羽で3シ

ズン連続で飛来しており、今シーズンはⅡ型コハクチョウの「ソーリー」と同行飛来したものの。「ヤン」と「ソーリー」はシーズン中ペア行動しており、4月2日には揃って新堤から飛去しましたが4月26, 27, 28日は毎日クッチャロ湖で確認され、「ナオチャン」同様にこの2羽も揃ってパンを受取りに来る行動は越冬地と変わらなかったのも、「クロチャン」一族は私共と相互に確認しあえさえすれば越冬地も立寄り地でも同じ親交状態は保たれることがわかりました。

(4) 冠のあるコハクチョウ：この白鳥は北上では今シーズン初めて観察されたもので、北上市珊瑚橋下流に北帰途中4日間滞在し、4月10日に飛去しました。4月28日クッチャロ湖の水鳥観察館に近い湖岸道路を白鳥の舎の方へ向う姿が認められました。東京の尾亦実さんによるとこの白鳥は福島県樽栖葉町の農業用水池の大堤で過去3年間連続で認められていたものようです。

以上が今回の観察の概要ですが、この旅で気付いた2、3の事柄について付言しておきます。ひとつは先着の利についてですが、北上から北帰した鳥で見る限りでは早く出発した順にクッチャロ湖白鳥の舎のより給餌場に近い位置で見つかっており、越冬地同様に先着した順に有利なポジションを確保していると思われます。次は渡りのルートに関するものですが、福島、宮城、岩手など東北太平洋側で越冬したコハクチョウおよびアメリカコハクチョウはかなりの高率でクッチャロ湖を日本での最終立寄り地としていると思われます。しかし少数例ですが北上の立寄り白鳥が稚内の大沼で確認されており、全部が全部クッチャロ湖というわけではないようです。最後になりましたが、今回の研修会でクッチャロ湖で観察された冠のあるコハクチョウおよび頸に大きな病巣のあるコハクチョウの内地での越冬地が判明しましたが、以前の研修会でも尋ね鳥などで特徴のある白鳥の移動情報が交換されました。このような情報はひとつひとつでも役に立つのですが、ああそうかでお仕舞いにするのではなく、整理して蓄積しておくことで、国内における白鳥の道の解明に資することが肝要と考えております。

以上

1996年5月6日記